

## ファイン・マット復興運動と女性の現金獲得：サモア独立国ジェンダー開発政策

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 山本 真鳥   |
| 出版者 | 法政大学経済学部学会  |
| 雑誌名 | 経済志林  |
| 巻   | 85  |
| 号   | 4   |
| ページ | 775-802   |
| 発行年 | 2018-03-23  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10114/14294">http://hdl.handle.net/10114/14294</a> |

# ファイン・マット復興運動と女性の現金獲得 —サモア独立国ジェンダー開発政策—

山 本 真 鳥

はじめに

サモア独立国概要

ジェンダー開発政策の現代的潮流

ファイン・マットと女性の仕事および財

サモア移民コミュニティと本国社会

ファイン・マット復興運動

ファイン・マット政策

ファイン・マットの市場価値

むすび

## はじめに

小論は、未だ伝統文化や伝統生活の名残をとどめた南太平洋の極小島嶼国サモアでのジェンダー開発プロジェクトを、山本のフィールドワークに基づき叙述することを目的としている。

吉村によると、開発における女性の問題は、開発途上国において全体経済が上向けば女性もその恩恵にあずかるはずであると従来考えられていたのが、必ずしも女性に恩恵が及んでいない、あるいは開発が途上国の女性にとってより悲惨な状態を招いていることもあるという実態を指摘したBoserupの業績（1970）に注目が集まり、開発におけるジェンダー問題を

議論する土壌が生まれたという（吉村 2004: 161-162）。

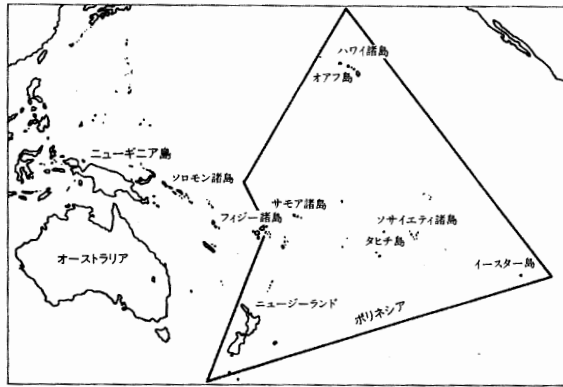
2000年に国連総会で決議された MDGs（ミレニアム開発目標）（外務省 HP n.d.）においても、また2015年に決議された SDGs（持続可能な開発目標）（United Nations 2015）においてもジェンダーの視点は開発目標として取り上げられている。MDGs では、8つの目標のひとつが、「ジェンダー平等の推進と女性の地位向上」であり、具体的ターゲットとして「可能な限り2005年までに、初等・中等教育における男女格差を解消し、2015年までに全ての教育レベルにおける男女格差を解消する」ことが掲げられている。

一方の SDGs は、「持続可能性」と「包括性」や、より細かな実施可能性に配慮が行われた MDGs の改良版（Fukuda-Purr 2016）で、17の目標が掲げられ、そのために169のターゲットがあげられている。第5の目標が「ジェンダー平等」となっており、具体的ターゲットとしては9項目が挙げられている。

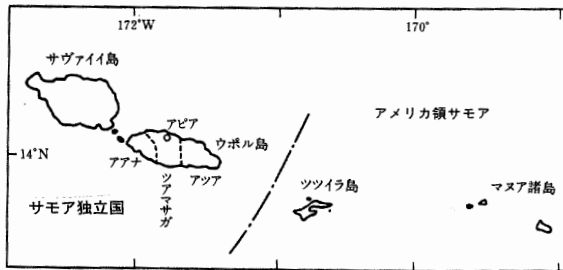
これらの世界全体の開発計画の動向をふまえつつ、サモアでのジェンダー開発プロジェクトの一つであるファイン・マツ増産政策を検討してみるのが、この論文のテーマである。

## サモア独立国概要

サモア独立国は1962年にニュージーランド信託統治領から独立した人口20万人足らずの極小島嶼国である。第二次大戦後、太平洋諸島で初めての独立であった。当初は西サモア独立国を名乗っていたが、1997年にサモア独立国と改名した。太平洋島嶼国の常として政治的独立はあっても経済的な独立を果たすことは難しい。かつて農業国として、バナナやカカオ、ココヤシなどの商品作物栽培が行われていたが、農産物の世界的な価格変動を受けやすく、独立後はそれらの生産や輸出額は減少傾向にあり、政府は農業振興のてこ入れをしていた時期もあるが、この試みはあまりうまく



ポリネシア



サモア諸島

いかなかった。一方で、独立前後から海外への出稼ぎ、移民が増加していくが、この移民からの送金と1990年頃に始まったインバウンド観光、そして先進国政府や国際機関等の援助が、サモア独立国としての国際収支を助けてきた。1997年の一人あたり GNI は1500USドル程度であるが、2014年には4000USドルを超えている (World Bank data Samoa n.d.)。

一方この国は、伝統を誇りとする土地柄であり、1960年に策定された憲法の前文にも「キリスト教の原理とサモアの慣習と伝統に基づく」と明記されている。伝統的リーダーである首長の位階制は現在も意味をもち、村落に存在する首長会議には法律により一定の権限が与えられている。もち

ろん、その権力は現在では多くの変容を遂げており、サモア人がイメージする完璧な首長（マタイ）に仕切られた大家族（アイガ）は、現在では理想であって現実ではないが、一方で個人主義志向はこの社会では公的には糾弾され、限られた資源を皆で分け合う、ということが尊ばれている<sup>1)</sup>。互酬性が理念として社会の隅々に行き渡っており、互酬性に基づく儀礼交換や贈与交換が盛んに行われている。また伝統社会の常として、ジェンダー役割分担（性分業）が強く存在している。かつては教員と看護師が女性の職場進出の代表的なものであった。近代的な場面でのジェンダー役割分担は現在ではさほど厳しくはないが、家庭生活および村落生活においては、昔ながらのジェンダー役割分担がそのまま生きる傾向にある。

## ジェンダー開発政策の現代的潮流

主婦論争を整理した後に、フェミニズムの二潮流を見事に区別した上野は、ジェンダーの相違を最大化する方向と最小化する方向とに分けて議論を整理してしている（上野 1986: 149-161）。すなわち、女性に割り当てられた家事、ケアといった役割を女性ジェンダーの長所と考え、それを最大限に生かそうという主婦擁護の立場がある。子どもを戦争に行かせたくない、という母親的思考の先を見据えて平和主義活動に取り組んだり、食生活の中心的役割から環境問題に切り込んだりといった立場であり、それも社会的には有益な役割を果たしていると評価する<sup>2)</sup>が、それは性差の最大化志向で、文化のトラップにはまったフェミニズムと考える。上野が与するのは性差を最小化する方向性であり、すべての人が自由に職業や行動

1) 親族集団によって集団的に所有される伝統的土地がサモア全土の85%ほどを占めている。首長らによって取り仕切られる土地は、必要な親族に分配され、割り当てを受けた人は耕作し作物を収穫することができるが、その土地を売却する権利はない。

2) 主婦擁護の立場は、家事やケアは現金収入をもたらさないが、家族生活を成り立たせる重要な活動であり、併せて主婦の役割を評価すべきであると主張する。

を選択する。家事も仕事も夫婦間で分担し分け合うというやり方である。仕事をしたいという女性が差別なく自分の望む仕事に就けるように、また女性一人に家事のしわ寄せが来ないように、男性も家事を分担する、という方向に向かうことになる。

世界的なフェミニズムもジェンダー開発の議論も、この上野の分類で行くと性差の最小化に向かう視点で行われてきた。その底流には女性と貧困の問題がある。途上国でも先進国でも離婚が増え、家族が崩壊し、片親家族が増える現状の中で、貧困撲滅のために女性が現金収入を確保することは必要不可欠の課題であった。

ジェンダー開発政策に関する限り、MDGs と SDGs とは、ジェンダー平等を推進するという点についてぶれはなさそうであるが、実はそれを推進する目標や設定値に多少の違いがある。MDGs の実現のそのインデックスとして「3.1 初等・中等・高等教育における男子生徒に対する女子生徒の比率、3.2 非農業部門における女性賃金労働者の割合、3.3 国会における女性議員の割合」の向上が謳われている。この3.2について、要するに女性も賃金労働者になることが課題となるのには、そのような背景がある。MDGs の枠組みでジェンダー開発の成果を列挙している Kabeer は、現金収入に結びつく職業に就くためには教育が必要であることを力説し、さらに職を得て現金収入を獲得する女性たちの覚醒、より積極的な社会参加が行われていることを力説し、女性が選択肢をもつようになった結果、その先に3.3といった成果が生まれることを論じている (Kabeer 2006)。

SDGsをより包括的であると同時に、MDGsでは誤解を招きかねなかったターゲット指標が、誤解なきように説かれていると Fukuda-Purr は評価する。「5.4 公共サービスの規定や、インフラストラクチャー、社会保護政策、それぞれの国の習わしにふさわしい家庭や家族内での責任の分担を推進することで、無給のケアや家事を認知しその価値を認めること」「5.5 政治・経済・公共生活に関する意思決定のあらゆるレベルにおけるリーダーシップに女性が十分かつ効果的に参画する機会を保障すること」とある。

「5.a それぞれの国の法律に合致して、経済的資源に対する等しい権利、土地やその他の財、金融サービス、相続や自然資源を所有し管理する権利を女性に与える改革を実施すること」。その他、女性への暴力、差別、人身売買などを禁じ、女性の教育やジェンダー平等を推進して女性と少女のエンパワメントを推進する必要を説いているといえよう。ある意味5.4などで、伝統社会のジェンダー役割分担に配慮しつつも、女性も現金収入をもち、男女に等しい権利と財を分配することでジェンダー平等を実現する、という基本的な姿勢には変化はないといえよう。すなわち、上野が主張するような、性差を最小限にする政策は世界中で一般的に主張されている政策パターンであるといえる。

### ファイン・マット<sup>3)</sup> と女性の仕事および財

サモアでファイン・マットと呼ばれている編み物は、サモア語ではイエ・トガ（*'ie tōga*）と呼ばれてきたゴザのようなものである。サモアのゴザ類には、大まかにいってファイン・マットのほかに、寝具用ゴザ、床用ゴザの3種類がある。いずれもパンダナス（タコノキ、学名 *Pandanaceae* sp.）の葉を乾燥させて後、編んだものであるが、パンダナスの種類と葉の処理の仕方で、できあがりは大きく異なっている。サモアで利用されているパンダナスは3種類、ラウイエ（*lau 'ie*）、ラウファラ（*lau fala*）、パオノ（*paono*）である。床マット、パパは堅いパオノを用いて、2センチほどの幅で織り込む。寝具マットは中間的堅さのラウファラを約1センチほどの幅で織り込む。その一方で、ファイン・マットはラウイエという種類のパンダナスの柔らかい葉の葉肉をとった表皮だけを細かく裂いて表皮を外側にして2枚重ねて斜め平織りに編んでいく。いずれのマットも斜め平織り

3) 政府が公式名称をイエ・サモア（*'ie Samoa*）とすることを定めて以来、サモア語名に混乱があるため、英語名を用いる。サモア一般でも通じる名称である。



写真1 アンティークのファイン・マット（オークランド博物館所蔵）

に編んでいくのを常としている。ファイン・マットは、小さいもので畳より少々大きい位の大きさで、長辺の一方を編みはなして繊維を房状に垂らし、その上に本来であれば、赤いオウムの羽を飾ってつける<sup>4)</sup>。

サモアのジェンダー役割分担は以下ようになっていた。男性は畑仕事や釣りなどの食糧生産活動が中心であるが、女性も草とりや浜の貝拾いやエビ取りなど補助的な作業をする。伝統的料理はたき火をして石を焼き、その上にイモ・バナナ類や魚、肉等をのせたあと、葉などをかぶせて蒸し焼きにするものであるが、重労働であり男性の仕事とされる。一方女性は、敷地内の掃除などに加えて、マット類やタパ（樹皮布）<sup>5)</sup>の製作を主に行うものとされている。また洗濯も女性の仕事である。

このようなジェンダー役割分担は、贈与財として用いられる女財（トガ, *tōga*）、男財（オロア, '*oloa*）という2つの財のカテゴリーに反映されてい

4) 現在はニワトリの羽を染色して飾ったり、中国から輸入した人工の赤い羽根をつけたりする。

5) クワノキの皮をたたき伸ばして作る紙のような衣料品。



る。女財は、ファイン・マツ、タバ、ヤシ油等をあげることはできるが、現在ではほとんどの場合、ファイン・マツのみがこの役割を果たしている。19世紀の文献によると、結婚式においては、花嫁方から花婿方には女財が贈られ、その逆に贈られる男財（オロア）と呼ばれるものはブタやタロイモであったという。しかし現在結婚式の場面で花婿方から花嫁方に贈られるものは現金に限られる。現金はまた19世紀の文献では、男財にカウントされる財であった。現代ではさらにブタにならんでカートン入り缶詰、コーンビーフなどの食糧も贈答品として用いられる。山本のかつての分析では、ブタ、カートン入り缶詰、コーンビーフなどは、もはや男財と呼ばれることはないが、現金と同様に男財として扱われていると考えて良い（山本 1985: 136-139）。

男財と女財は結婚式の花嫁方と花婿方の交換において、もっとも純粋な形での交換となっており、ファイン・マツと現金とを交換する。しかしその双方において、必要な財——花嫁方では女財、花婿方では男財——が必要であり、それに貢献すべく、様々な親類縁者がその財の集積に協力し、そのために大勢の人々が、財を贈り合うために、結婚式を焦点として、多くの財の交換がイモヅル式に巻き起こっていく。同様の儀礼交換に伴うイモヅル式の財の贈り合いは、初子の誕生祝い、首長の称号就任式、首長の葬式、教会や牧師館の落成式においても繰り上げられる。人々はこれらの儀礼に巻き込まれる形で、互酬的交換を行うことになり、これらの一連の儀礼交換をファアラベラベ (*fa'alavelave*) と呼ぶが、ファアラベラベとはサモア語で「日常生活が妨げられること」や「障がい」、「面倒なこと」をさしている。これら儀礼交換は、親族ネットワークの張り巡らされたサモア社会において、絶えず生じている事象であり、その度に人々はため息をつきながら贈与財や現金を用意し、またその返礼を携えて帰宅する（山本・山本 1996: 3-17）。

さて、食糧はその都度食べられ、なくなってしまう性格の財である。缶詰などは、とっておいてまた交換に供されることもないわけではないが、

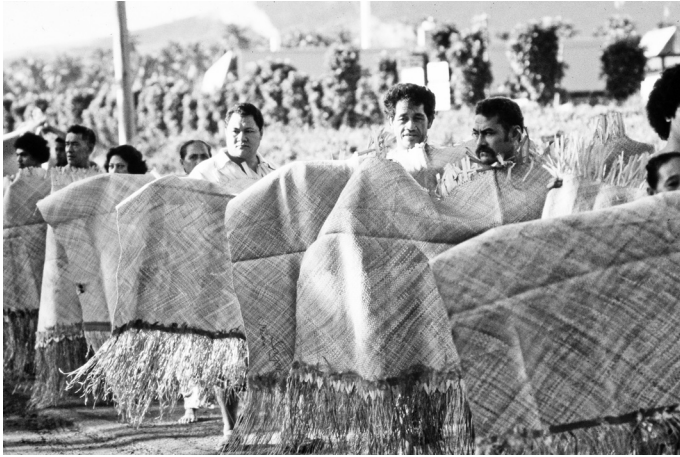


写真2 儀礼交換でファイン・マットを贈る（サモアにて）

多くの場合、食糧はもらってきた人が生活の中で消費してしまう。それに対して、ファイン・マットは実は贈与品として渡される以外の用途はほとんどない。高位首長やその娘・息子など身分の高い人が儀礼や公的ダンスの晴れの舞台において、ファイン・マットをまとうことはないわけではな  
いが、ごく限られた場面であり、ほとんどのファイン・マットは、入手すると首長やその妻などのベッドの下に隠しておいたり、長持ちの中に入れたりしてとっておいて、贈与すべき次の場面で贈与に供されることになる。人々の手から手へと贈与されていくのが、ファイン・マットの主たる価値であり、その点でファイン・マットは貨幣に近いといえないこともない。文化人類学の用語で呼ぶならば、原始貨幣、あるいは、交換財、威信財ということになる。

実はファイン・マットは、女性の労働を入念に縮約したようなもので、目の詰んだファイン・マットは1年や半年をかけて製作されるものであると19世紀の民族誌には書かれている（e.g. Turner 1984(1884): 93; Stair 1897: 173）。ファイン・マットの希少性はこのようにして担保されている。

より目の詰んだもの、歴史性のあるものに価値があり、そのようなファイン・マットには固有名があるほどである。しかし筆者が初めてサモアを訪れた1978年には、ファイン・マットの粗製濫造が始まっていた。この点については次章で詳述する。

さて、このジェンダー役割分担の明確となっているサモア社会において、ファイン・マットの製作は現在でも女性に割り当てられた仕事であり、ある意味で女性の行う特権である。

### サモア移民コミュニティと本国社会

太平洋諸島から環太平洋先進地域への移民が盛んに行われるようになったのは、それほど古いことではなく、主に第二次世界大戦後のことである。サモア独立国（当時は西サモア）からは当時の宗主国であるニュージーランドで終戦直後工業化が始まり、村落地域に居住していたマオリが都市に移住して工場労働を担っていたが、それも十分ではなく、そのニッチを埋めるべくサモアなどの島嶼地域からの出稼ぎが盛んとなった。サモアでも現金経済が次第に浸透しつつある中で、出稼ぎ労働者の送金は重要だった。一時滞在のつもりでやってきた人々は、次第にニュージーランドに定着し、オークランド、ウェリントンなどの都市部に移民コミュニティを作ることになる。また、アメリカ領サモアでは1950年代の終わり頃に、缶詰工場ができ、その労働の多くは西サモアからの移民労働者が担った。現在でも東西サモア間には婚姻関係、親族関係が存在しているので、ビザ用のスポンサー探しは容易であった。さらにアメリカ領サモア人はハワイ、カリフォルニア等に自由に移住できる権利を有していたために、移民した親族を通じて合衆国へと移住する西サモア人も多く存在していた。現在サモア独立国の人口が188,000（2011年センサス）であるのに対し、アメリカ領サモアの人口は、56,000（2010年センサス）で、東西サモアを併せて25万人に満たない程度の人口であるのに対し、混血も含め35万人を超えるサモア系の

移民が海外に居住している<sup>6)</sup>。

これらの海外移民のすべてが行うわけではないが、移民の送金は本国サモアの親族にとって必要なものとなっている。定期的に故郷の父母のために送金を欠かさない若者もいるし、クリスマスなど行事の出費を目的とした送金もあるが、儀礼交換を目的とする送金は送金全体の大きな部分を占めている。儀礼の規模や親族関係によっては、移民自身が多く現金を携えて故郷を訪問する。たとえば親の葬式には子どもたちの多くが海外にいても必ず集まってくる。また、海外移民コミュニティで開催される儀礼交換には、故郷の親族の中で重要人物が招待されてやってくるのであるが、そのときにはたっぴりとファイン・マツを持参するのである。

こうした関係の中で、移民からは現金が、また本国の親族からはファイン・マツがもたらされるというフローが生じた。確かに移住先ではパンダナスは育たないので、よほどのことが無い限りファイン・マツの生産は行われない。移民にはファイン・マツがないというイメージは本国人にはわかりやすい。一方、本国は現金がなくて困っている。その間には市場経済的な取引が行われているわけではなく、それぞれが相手の持っていないはずのものを贈り合うという形で、互酬的な財の贈与交換として成立している。あれほど多くの現金を与えてくれたのだから、ファイン・マツをお返しなくては、と本国人は考えるし、あれだけファイン・マツを持参してくれた本国からのお客にはたっぴり現金を持たせて帰国させてあげよう、と移民は考える。

女方、男方の区分とそれぞれの贈り合う財のカテゴリーはある程度守られ、しきたりに合わせてさまざまな名目が組み合わされているものの、近年はそれぞれの立ち位置に合わせた財を多く贈り合うことがなされるようになった。サモア独立国の非都市部と都市部の間では、非都市部からファ

---

6) ニュージーランド居住のサモア人は131,000人（2006年センサス）、合衆国居住のサモア人は184,000人（2010年センサス）、オーストラリア居住のサモア人は40,000人（2006年センサス）となっている。

イン・マットが<sup>6</sup>、都市部からは現金が<sup>6</sup>、東西サモアの間では、西からはファイン・マットが<sup>6</sup>、東<sup>7)</sup>からは現金が<sup>6</sup>、海外サモア人コミュニティとサモア独立国との間では、サモアからはファイン・マットが<sup>6</sup>、海外からは現金がという具合に財が取り交わされるのである。

さらに、儀礼交換ではなく、伝統的な団体旅行（マラガ, *malaga*）という形で、教会の婦人会や青年会が、寄付金集めに海外コミュニティを訪問することが行われている。マラガの集団は、ファイン・マットを持参するだけでよく、受け入れ方は食住を提供し歓待しなければならない。マラガの集団は、コノセティ<sup>8)</sup> といって歌や踊りのショウを行って、献金を募り、教会建設などの資金集めを行うのが常であった。コノセティの会場を提供し、マラガの滞在中の世話をする移民コミュニティの教会の信徒団に対して、お礼としてファイン・マットの正式な贈与の儀礼を行うこととなっている。

ファイン・マットはこのように、現金の反対給付のフローを形成することになるわけであるが、現代では職業につく女性も多く、かつてよりは編み手の数は減少している。村落地域の女性のみが生産の担い手であると同時に、彼女らは海外に出て行くファイン・マットも生産する必要があるため、ファイン・マットは大量生産が必要となり、粗製乱増する結果となった。一方、現金収入を得ることが難しい地域では、現金と換えることが可能なファイン・マットは何枚持っていても有用な品であった。市場交換の場でなくても、儀礼に持参すれば食糧や現金に換えることができるし、儀礼に持参するためにファイン・マットを必要としている人はいつでもいる。必要なのに持っていない人は、持っていそうな人を訪問して、必要である

7) 東サモア（アメリカ領サモア）では、合衆国海外領土として、合衆国の労賃がそのままあてはまらないまでも、労賃はそれに近い額となっており、周辺諸国から見ると大変高額の賃金となっている。経済状況の改善した現在のサモア独立国でもその労賃は時給にして1 USドル程度であるから、アメリカ領サモアの賃金は5倍以上に上る。

8) Concert のサモア語転訛。

と訴える。この行為をトトマ (*totoma*) という。トトマに対してファイン・マットを分けてあげると、ファイン・マットの受け手は、ではお礼を差し上げたいといって現金で返礼することもあるし、現金を持たずその場で返礼できなくても、儀礼にファイン・マットを持参すれば、返礼に現金や食糧をもらうから、それをトトマに応じてくれた人に渡すことになる。市場交換を行わなくても、食糧や現金を得ることができる。というわけで、村落地域の女性たちは暇さえあればファイン・マットを編み、機会を捉えて現金や食糧に換えることを狙っていたのである。こうして、ファイン・マットは日々粗悪化していった。遠い過去には1年かけて作っていたものが、70年代終わり頃には1週間程度で完成していて、90年代頃には2日や3日で仕上がると言われており、人によっては1日で作ると豪語する女性もいた。こうして、ファイン・マットの多くは移民コミュニティにたどり着くようになっていた。

理論的には移民コミュニティではファイン・マットが不足しているはずであったが、ファイン・マットは消費されないため、次第に蓄積されていき、移民コミュニティの儀礼交換に登場するファイン・マットの数は本国社会のそれを凌駕するようになった。80年代後半にハワイを訪れたときに



写真3 移民社会で10枚1束のファイン・マットを贈る (ホノルルにて)

は、小さい粗悪品のファイン・マットは10枚一束で贈与するようになっていた（写真3）。92年に目撃したサンフランシスコ湾岸での葬式でも10枚一束のファイン・マットの贈与が行われていた。同年の末に訪れたアメリカ領サモアでは、葬式の贈与のためにファイン・マットがぎっしり詰まったコンテナが運び込まれた。

粗悪化したファイン・マットは、品質的には寝具マットとほとんど変わらなかったし、材質もしばしば寝具マットと同じ、ラウファラが用いられ、葉肉を取り去ることもされない幅1センチ程度の繊維が使用されていた。しかも人の手から手へと渡され、どこに置かれていたか、ほこりだらけで汚れていることもある。移民コミュニティの二世は、しばしば、親たちが夢中になっているファイン・マットの価値がわからず、親の気持ちが理解できないのであった。あんな汚い何の役にも立たないマットを後生大事に持ち帰るのはどうしてか、という疑問の声を聞いたのは一度や二度ではなかった。

## ファイン・マット復興運動

同様に、私自身もそうした状況を心得ていたために、その後の復興運動の流れに気づくまでには時間がかかった。1996年にサモア独立国（当時は西サモア）で第7回太平洋芸術祭が開催されたとき、太平洋芸術祭の催しとしては初めての現代美術展が開催された。そのとき発表された図録 *Taeao Fou i Mea Sina*<sup>9)</sup> で表紙をはじめとして、太平洋の現代美術家たちの作品の間に、挿入されたアンティークのファイン・マットの写真を今更ながらに眺めて、複雑な気持ちだったことを今も覚えている。そうね、貴重品だったものだ、と。メアシナとは字義通りには貴重品、お宝のことであるが、

9) 「宝物の新しい朝」という意味のサモア語。「新しい朝」というのは、新しく迎える、新生、再生を意味しており、サモア語の演説の中で尊ばれ、好まれる隠喩的表現である。



単にメアシナといったらファイン・マットのことを指していたからである。

しかし、その頃すでに、ファイン・マットの復興運動は始まっていた。UNDP（国連開発計画）でジェンダー開発が取り上げられるようになって久しかった1990年代になって、ニュージーランドODAによってこの恩恵を太平洋にももたらす動きがあった。おそらくこれは、PIANGO（Pacific Islands Association of Non-Governmental Organisations）の1991年の設立（PIANGO Official page）と無関係ではない。ODAの受け皿が政府だけでなくNGOにも認められるようになる流れが世界中で生じ、この頃に太平洋諸島各地でもNGOが設立された。サモアが女子差別撤廃条約を批准したのも1992年のことである。女性のウィービング能力を高めて、さまざまなお土産品開発を行うというプロジェクトが始まった。サモアでも、パンダナスのバッグやランチョンマット、タパ（樹皮布）の装飾品、ココナツ製のボタンなどは土産品としてかつてより生産されていたが、これらを増産して、サモア国内だけでなく、ハワイ等の市場を開拓するという構想である。マスツーリズムの盛んなハワイでのお土産市場で、ハンディクラフト類はハワイ製ではなくフィリピン製が幅をきかせており、大量に売れているというのは周知の事実であるが、そこへの参入を視野に入れていた。

そのプロジェクトを受けたのが、WiBDI<sup>10)</sup>（Women in Business Development Incorporated）というNGOであった。この団体は設立が1991年（Tafuna'i 2006）。女性がビジネスを行う際に、融資が受けにくいなど不利な点を抱えているが、それを克服することを信条として設立された（倉光 2003: 36）。しかし、現在では特に女性に限らず、スモールビジネスやサモアに適したビジネスのワークショップを行ったり、事業家のコンサルテーションを行ったりすることが主な活動となっている。養蜂や有機栽培等を主に手がけ、有機栽培のココナツオイル等の海外輸出を広く手がけている。しかし、ファイン・マット事業は、最初に手がけたプロジェクトであ

10) 当時の名称は、WiBF（Women in Business Foundation）。



り、この組織の原点であるから、重視しているとは事務局長の弁である。

さてこのニュージーランドODA で取り上げられた女性のウィービング事業であるが、WiBDI はお土産品の製造に加えて、ファイン・マットの復興事業を提案した。ファイン・マットは当時粗製濫造が目立ち、大変価値薄いものとなりつつあったが、市場でもこれが売り物として出品されるようになっていることから、女性が現金収入獲得を目指せるということに加えて、これが女性の仕事として伝統的に高く評価されるものであったということがある。粗製濫造のために当時女性は誇りをもってウィービングをすることができていないが、これを誇らしい仕事とするために、伝統的なウィービングの技術を復興し、若い人々に伝授していく、ということを目指とした。そのためにワークショップを開催して、葉のプロセスの仕方、編み方のこつなどを伝授し、情報交換を行うことをした。

最初は、ただ葉を細く裂くことだけしたファイン・マットの製作を行っていたが、やがて、村落地域在住の老女が、葉のプロセスの仕方を教えてくれるようになった<sup>11)</sup>。それは、以下の通りである。ラウイエという種類のパンダナスの葉を根元から切り取ってきて、とげを落とし、天日干しにする。そのあと、葉をゆでて数日間海水につける。このプロセスにより、葉は白く変色する。その後天日干しにして何度もしごいて平らにしてから、葉を巻いた束を作る。おおよそ50枚の葉を巻いたものが単位となる。編むときには、束を開いて葉をとり、薄く表皮をはがして、内側にまだついている葉肉をしごいて取り去る。細く裂いて、その繊維を2枚両側とも葉の表が来るように合わせて、斜め平織りに編み込む。繊維の幅は細いほど良いが、限度がある。博物館に保存してあるファイン・マットを見ると、繊維の幅が髪の毛ほどのものもあるが、おそらくは繊維が縮んだのであろうと言われている。現在の製作となるものでは1.2mm程度が最小である。表

11) WiBDI では、この知識をもった最後の1人と説明しているが、この技術を知っていた人はこの老女に限らないと思われる。しかし多くのサモア人女性にこの知識が行き渡っていたわけではないし、未だに普及するところまではいっていない。

皮の細かな繊維だけを用いて作ったファイン・マットを WiBDI ではイエ・サエ（'ie sae）と呼んだ。

こうしたワークショップの開催は、WiBDI の大きな功績といえるが、この組織がもうひとつ大きな変革を及ぼしたのは、ファイン・マットを現金獲得手段として位置づけ、しかもそれを容易にしたことである。ファイン・マットの製作はまず、女性の仕事であったが、それは公式には互酬経済の中での評価であり、ファイン・マットを買うことはかまわないが、ファイン・マットを売ることは下品な行いであるという常識が、普通のサモア人の受け止め方であった。WiBDI はその考えに挑戦し、ファイン・マット製作を労働として位置づけ、正当な賃金が支払われるべきであると考えた。スポンサーシップ・スキームという制度の導入は、WiBDI のこうした考え方に基づいている。従来現金にアクセスしにくい村落地域に住んでいて、ウィービングをしたいと考える女性は多かったし、上質の美しいファイン・マットを作りたいと考えていた人も多いはずだが、この製作には多くの時間と労力を投入しなくてはならないし、完成すれば多額の収入が見込めるにも拘わらず、製作期間中全くの無収入となるのが苦しい。また、ファイン・マットの買い手からすれば、大変高い買い物となるから、それだけ一時に現金を集めるのもしんどい話である。そこで WiBDI が提案したのは、以下の方法である。買い手はスポンサーとなり、編み手と WiBDI との3者で契約を結ぶ。スポンサーは2週間に一度定額を振り込み、WiBDI は編み手の仕事をチェックして進行具合に応じて支払いをする。仕上がった暁には、ある程度まとまった額の支払いをして、スポンサーはファイン・マットを受け取るのである。この方法だと、買い手も確実にファイン・マットを受け取れるし、編み手も定額収入が可能となるわけである。このスポンサーシップ・スキームは大変成功した。またこうして、ジェンダー開発政策に則った女性の現金獲得手段としての位置づけは、ファイン・マットを売り買いすることの後ろめたさを取り除いて行く結果を導いた。スポンサーシップ・スキームで最初のイエ・サエが仕上がったのは2000年頃のこと

であった。

## ファイン・マット政策

WiBDI はその後、編み手たちを動員して2002年の母の日に完成したファイン・マットを広げて持ち、首都アピアの政府前広場付近でパレードを行った。またそれに先だって、ファイン・マットの振興のために政府に請願をかけていた。これにツイラエパ首相が応じて、母の日に演説を行った。この演説はラジオ、テレビを通じて全サモアに放映された。彼の演説の内容は、根のいる仕事を行った女性たち（母たち）を褒め、このサモアの誇りを取り戻す運動を称賛するものであった。そして、一般的に使われている粗悪化した小さいサイズのファイン・マットをラーラガ<sup>12)</sup> (*lālaga*) と蔑んで呼び、ラーラガが蔓延している状況を嘆くと共に、一枚の良質ファイン・マットをもって儀礼交換に望もう、数がいくらあってもサモアの誇りとは無縁のラーラガは意味がないから、これは使わないようにしようというものであった。

このあたりから政府がファイン・マットの慣習に積極的に関わっていくことになる。WiBDI も事業は継続しているが、それ以上に政府が政策としてファイン・マット振興を行ったことは大きい。首相は、ファイン・マット常設委員会を組織し、さまざまな政策を打ち出していった。主管する官庁は、女性・共同体・社会開発省 (Ministry of Women, Community and Social Development, 以下 MWCSO) となり、同省女性局が具体的なファイン・マットの振興策を担うこととなった。WiBDI の提案通りに、サモア語でイエ・トガと呼ばれていたファイン・マットの公式名称はイエ・サモアとなった。また、ラーラガの禁止を呼びかける首相の演説は多くの賛同を得る結果となり、サモア独立国内ばかりでなく、ニュージーランドやハワ

---

12) 堅い粗悪品マットのことをいう。

イなどのサモア独立国出身の移民コミュニティではラーラガのやりとりは鳴りを潜めた。

女性局はサモアの各村に存在する婦人会（komiti）を通じて、ファレ・ララガ（字義通りには編み物の家、fale lalaga）を作ることを推進し、定期的に視察を行い、上質のファイン・マット生産を振興した。

また、ファイン・マット常設委員会は、ファイン・マットの標準規格を作った。上質のファイン・マットはイエ・サエと呼ばれるようになったが、イエ・サエの大きさは9アガ×12アガ<sup>13)</sup>とされた。イエ・サエはラウイエを正しくプロセスして、葉肉を取り除いた表皮だけで作らなくてはならず、編み込む繊維の幅によって、1等級（1.5mm）、2等級（2mm）、3等級（3mm）と分かれ、それより繊維の太いものはイエ・サエとは呼ばないこととなった。

筆者は2011年の現地調査に際して、女性局の担当者の視察に同行させてもらった。ファレ・ララガは伝統的な活動のひとつで、一週間に一度（たいてい水曜日から木曜日）集まっておしゃべりをしたり、歌ったり、食事を



写真4 ファレ・ララガでの視察風景（サモア・サヴァイイ島にて）

13) 最初は8アガ×11アガとされていたが、後にこのサイズに改められた。アガ（aga）は、手のひらをいっぱいに広げたときの親指と小指を両端とする長さであり、20センチ程度であろうか。

とったりしながら、一緒に編み物をする。視察チームは2週間かけてサモア中を回り、登録済みのファレ・ララガに立ち寄って、ファイン・マット生産の進展をチェックする。2014年2月現在のデータによれば、ファレ・ララガはウポル島には101、サヴァイイ島には96が登録されているが、活動が継続中で視察が入っているものはその半数程度である。

4泊5日でサヴァイイ島を一周する行程に同行するのは、本庁からの役人2名とサヴァイイ島常駐の役人2名に、ファイン・マットの専門家として雇われているマツアウウ (*matua u'u*) と呼ばれる年配の女性である。この人が、製作中のファイン・マットをチェックして出来を等級に分けて枚数を報告すると、役人はノートにつけていく。数からいって、相当のものができあがっているように見えるが、実際に政府の企画に合うイエ・サエの数は限られている。それ以外の女性たちは、ラウイエをプロセスした繊維を使っているものの、繊維の幅は4～5mmとなっていて、政府のイエ・サエの規格に合うものではない。規格に合うものは根気もいるし、気をつけて作らないと繊維が切れてしまったりする。

女性局は毎年年末に、ファアレガ・ペペと呼ばれる行事を行っている<sup>14)</sup>。これは、ファイン・マットが完成したときに村で行われていた伝統行事に則ったもので、アピア市とサレロログ市の両方で行われる。女性たちは完成したファイン・マットを掲げてパレードし、人々は美しいファイン・マットを讃える。政府の行うこの行事の中では、それぞれの等級で最も美しいイエ・サエを製作した編み手各一名に報奨金が渡される。1等級1000サモア・ドル、2等級800サモア・ドル、3等級500サモア・ドルであった<sup>15)</sup>。

14) 2011年には開催されず、2012年より毎年母の日（5月第二日曜日）に開催されるようになった。

15) 結局この報奨金は、同じ等級で作成したすべての女性に与えられるようになってしまったようである。2017年には、予想をはるかに越える300枚の一等級イエ・サエが母の日の展示会に出品された。報奨金総額は30万サモア・ドルとなったため、来年からは減額されるのではないかという噂が飛び交っていた。1サモア・ドルは約45円（2018年1月現在）。

そうしたファイン・マット復興運動をサポートする政策の裏には、首相を含む一部政府の人々の儀礼交換に対する疑問があった。多くの食糧や財がそこで浪費され、ファイン・マットと多額の財や現金が取り交わされることには疑問を呈していた。ファレウラ・コミティ (*Komiti Faleula*) という有識者や高位首長たちからなる委員会が作られ、サモアのももとの慣習では、これほど多くのファイン・マットが交換されてはいなかった、いいファイン・マットを一枚だけ贈与しよう、といったキャンペーンを2011年頃には行っていた。政府はラーラガを儀礼交換の場面から駆逐することには成功したが、代わりに増えたのは、特大サイズのファイン・マットであった。これは、ものによっては数メートル×数メートルで、贈与に際してディスプレイするときには棒をかまさないといけない位大きくて、品質はラーラガと変わらないものである。人々はこれをイエ・テテレ (特大のイエ、*'ie tetele*) と呼んでいるが、1990年頃から儀礼交換で目立つようになった。首相はイエ・サエが増えれば、イエ・テテレが減るのではないかと期待しているようだ。

## ファイン・マットの経済効果

さて、そうやってファイン・マット復興運動で再興されたファイン・マットはどのくらいの値段がつくかというと、人によって異なるが、一等級が4,000ターラーから5,500ターラー、二等級が3,000ターラーから4,500ターラー、三等級が2,000～3,000ターラー位、規格外のものは700ターラーから800ターラー程度であるといわれる。非熟練労働者の年収が6,000ターラー前後であり、一般事務員の給料が11,000ターラー程度 (Government of Samoa, Samoa Bureau of Statistics 2013: 43) であるから、1年間に2枚のイエ・サエを仕上げると、それだけで一般事務員の給料に近いものとなる。ファレ・ララガで生産したイエ・サエの場合、政府は売買の仲介をしないことになっているが、役人に問い合わせがある場合には、完成品を持って



写真5 稀な機会に儀礼に登場したイエ・サエ

いる編み手や、近々完成しそうな編み手を紹介するという。WiBDI のスポンサーシップ・スキームでどのくらい売れているかを訊ねると、あまり情報開示はしてくれないのだが、10枚から20枚程度の様子である。定期的にスポンサーシップ・スキームの契約に入る編み手が15人程度、政府のファレ・ララガで編んでいる人は、WiBDI の編み手とは重複していることが多い。おおよその推測の域を出ないが、2011年の現地調査の時点でサモア全土で30枚から50枚というのが年間の産額だろうか。

政府のてこ入れにも拘わらず、それほど大きい数字が出ないのには理由がある。編み手の方の労働投下も相当なものになるが、買い手の支払う金額も現地では相当の高額である。現地で買える人というのは、牧師や、政府・会社の CEO 級位である。WiBDI は海外からの問い合わせが多いという。しかしニュージーランドのサモア人コミュニティで訊ねても WiBDI のスキームを知っている人はいなかった。むしろ、隣国トンガの貴族や金持ちがよい顧客のようである。トンガではファイン・マットは家宝となり、親族の間で受け継がれるものとなっている。サモアではファイン・マットは贈与品であるから、一旦贈与したら、手元を離れてしまう。1人娘の結



婚や有力者だった親の葬式などよほどの機会がない限り、普通の儀礼交換にそれだけのものを用意する人はいない。そして、スポンサーシップ・スキームや、ファレ・ララガの制度ができてから、15年が経過しており、毎年少ないながらも一定数のイエ・サエが完成していながら、サモアの儀礼交換に出てくるイエ・サエは本当に少ない。イエ・サエを購入した数少ない人に訊ねると、ほとんどは自分や親の葬式のために大事に保管してあるという。粗悪品のファイン・マット、ラーラガが蔓延したときも、「悪貨は良貨を駆逐する」の原則通り、儀礼交換に供出されるファイン・マットはほとんどがラーラガであったが、現在もラーラガが大マットに代わっただけでこれは変わっていない。

イエ・サエの数少ない編み手たちの間では、これが神経を使うやっかいな仕事であることを認めつつも、生産物は誇りの持てるものであることと、高収入については評価が高い。スポンサーシップ・スキームの編み手の中には、村落部で定期的な現金へのアクセスが限られた地から、子どもを都市の学校に入れて大学まで出した人もいる。また、事務員になっても毎日職場に行って頭の疲れる仕事をするよりも、家にいて家族と過ごししながら同じ額を稼げるなら、この方がずっと良い、と答えた高学歴の女性もいた。



写真6 儀礼で贈られる大マット（イエ・テテレ）（オークランドにて）



互酬の交換の贈与品である普通のファイン・マットをやりとりした場合、きちんとした現金になって返ってくるとは限らず、うやむやになってしまいうことも多いが、ことイエ・サエの編み手に限っては、きっちりと現金での報酬を入手することが行われている様子である。その意味で、現金収入獲得手段としてのファイン・マット政策はうまくいったという印象を持った。

一方で、サモアでは現在でも多くのファレ・ララガに参加していない編み手が存在している。村落部をドライブすると、多くのオープンハウス——サモアの伝統家屋には壁がない——では、女性がせっせとファイン・マットを編んでいる様子が見える。これらの女性たちが作っているのは例外なくイエ・テテレであった。話を聞くと、市場<sup>いちば</sup>に行き行って売するという。なかには母娘の2名で作業していることもあった。イエ・テテレの場合、手が変わってもわからず、緻密でないから作業が楽だという。ものにもよるが、数百ドルで売れるそうで、1～2ヶ月で完成できる。こちらの場合、安いので売れるのも楽だし、儀礼交換で必要になったら自分で贈答品として持って行くこともできる。村でトトマに来る人にもあげることができるというわけだ。互酬的にも使えるし、市場売買も可能であれば、こちらの方がずっと扱いやすいのである。

また、儀礼交換の場面でも、相当格式ある儀礼における、儀礼を執り行った牧師への贈与、儀礼の主人公の姻族への贈与などでイエ・サエを効果的に使うことはあっても、誰にでもイエ・サエを贈与するということは不可能である。近年では、ファレ・ララガで作っていた、繊維の大きい、しかし葉肉をとりのぞいてあるしなやかなファイン・マットが、市場でも売られ、儀礼交換にも登場してきている様子である。

ただしこれは、微妙なバランスの上で成り立っている。政府の行うファイン・マット増産計画が見事に成功した場合には、イエ・サエが大量に出回り、値段は暴落する。そうなったときには、イエ・サエの編み手のインセンティブがぐっと下がることになってしまう。両方の力学の微妙な着地

点に留まるようでは、普及は難しい。すなわちジェンダー開発として大成功を収めることは考えにくいプロジェクトなのである。現にその兆候は現れ始めている。2017年のファイレガ・ペペの折には、300枚の一等級イエ・サエが展示されたとのことである。それだけの数のイエ・サエがサモアでもとの値段で売れるとはとても思えない。また、MWCSO の内部は新しい CEO を迎えた結果、組織改変があり、女性局は社会開発局へと名称変更となり、ファイン・マットのプロジェクトは同じ省内の経済開発局へと移管された。前の担当者は先行き不安を訴えていたが、一方で経済開発局もまだ再編中で何も決まっていないとの返事であった。

## むすび

サモアは未だ伝統文化の中で、高度のジェンダー役割分担の生きている社会である。政府役人の経験者の中にも、女子差別撤廃条約を批准しながら、数値目標にはとらわれずもう少し現実を見なくてはならない、サモアの女性は女性としての誇りを持ち、その役割を果たしているという意見があった。その中でのファイン・マット振興政策は、サモア固有のジェンダー役割分担に基づく現実的施策となっていることに注目したい。もともとサブシステンス経済に基づいている中で MDGs の3.2のような「非農業部門における女性賃金労働者の割合を増やす」といった目標が難しいのは当然としても、SDGs のやんわりとしたジェンダー開発のゴールに国政や行政のレベルで女性の参画は一足飛びに実現できるかもしれないが、社会末端のジェンダー役割分担を超えるのはなかなか難しい。その中で、このプロジェクトは、女性の現金獲得手段の実現という点に絞って考えれば、なかなかよいプロジェクトであったし、WiBDI のスポンサーシップ・スキームも評価できるといえる。しかし、サモア社会全体の中で考えて見た場合、

---

16) 人口約10万人程度でサモアより小さい。

イエ・サエの普及には限度がある。高度に文化的な産物であるが故に、トンガ<sup>16)</sup> という国外の市場が幸運にも存在しているとはいえ、市場の大きさには限度がある。その意味では、現金獲得のための開発事業としては、ファイン・マット製作の技術を使う非伝統的な他の商品開発<sup>17)</sup> を行うことが急務であると筆者は考えるようになった。

## 献辞

論文のもととなったデータは、2011年7月～9月の現地調査、2014年3月、2017年8月の短期調査期間中に集積されたものである。財政的には日本学術振興会科学研究費の助成によるものである。基盤C「グローバル化する互酬性—サモア儀礼交換の新たな展開」（課題番号23520999, 2011-2014）「太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に」（課題番号15K03058, 2015-2018）。記して感謝したい。またサモア政府女性・コミュニティ・社会開発省女性局、国立サモア大学サモア研究センターにも大変お世話になっている。そのほか多くのサモアの友人たちに助けられてこの研究が成り立っている。最後に、開発人類学に開眼させてくださった同僚の絵所秀紀教授に感謝したい。教務を離れての一層の御活躍を祈念いたします。

## 参考文献

- 上野千鶴子（1986）『女は世界を救えるか』勁草書房。
- 外務省（n.d.）「ミレニアム開発計画とは？」（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs/about.html#background>）（2018/1/7閲覧）
- 倉光ミナ子（2003）「開発における女性組織・NGOの変遷とその特徴—南太平洋のサモアを事例として」『APCアジア太平洋研究』13: 29-43.
- 山本真鳥（1985）「サモアにおける交換財の変容」川田順造編『文化人類学』1: 126-148.
- 山本真鳥（2016）「グローバル化する 互酬性——サモア世界の儀礼財の循環と

17) たとえば、クック諸島のパナマ帽のようなもの。

- 首長制」総合研究大学院大学提出の博士号請求論文)
- 吉村真子 (2004) 「開発とジェンダー」 山本真鳥編『性と文化』法政大学出版局, p.159-229.
- Boserup, E. (1970) *Women's Role in Economic Development*. London: Earthscan Publication.
- First Pacific Festival Contemporary Art Exhibition Committee (1996) *Taeao Fou I Mea Sina*. Office of the 7<sup>th</sup> Pacific Festival of Arts.
- Fukuda-Purr, Sakiko (2016) From the Millennium Development Goals to the Sustainable Development Goals: Shifts in purpose, concept, and politics of global goal setting for development. *Gender & Development* 24 (1): 43-52.
- Government of Samoa, Samoa Bureau of Statistics (2013) *Statistical Abstract 2014*. Apia: Samoa Bureau of Statistics. (<http://www.sbs.gov.ws/index.php/new-document-library?view=download&fileId=1649>) (2018/1/10閲覧)
- Kabeer, Naila (2005) Gender equality and women's empowerment: A critical Analysis of the third millennium development goal 1. *Gender & Development* 13 (1): 13-24.
- Pacific Islands Association of Non-governmental Organizations Official Page (<http://www.piango.org/>) (2018/1/8)
- Tafuna'i, Adimaimalaga (2006) *E A le Inailau A Tamaitai* The Women's Row of Thatch was Completed. Arlene Griffen ed. *Lalanga Pasiika, Weaving the Pacific: Stories of Empowerment from the South Pacific*. Suva: Pacific Studies Programme, PIAS-DG, USP and the Commonwealth Foundation, pp.103-163.
- United Nations (2015) *Transforming our World: The 2030 Agenda for Sustainable Development*. (<https://sustainabledevelopment.un.org/post2015/transformingourworld/publication>) (2018/1/7閲覧)
- World Bank (n.d.) World Bank Data: Samoa (<https://data.worldbank.org/country/Samoa>) (2018/1/4閲覧)

Revival of Fine Mats Production and Income  
Generation for Women: Gender Development  
Policy in the Independent State of Samoa

Matori YAMAMOTO

《Abstract》

Both MDGs and SDGs contain gender development in their goals with the former aiming to “Promote gender equality and empower women” and the latter hoping to “Achieve gender equality and empower all women and girls.” Both intend to minimize gender gaps, which is a global trend in gender development policy. Nevertheless, in the Independent State of Samoa, which is a traditional society where the traditional division of labor is significant in everyday life in rural areas, gender development policies have to compromise between the maximalization and minimalization of gender roles.

Fine mats are traditional female valuables that are woven by women who need to concentrate on delicate work in order to create the fine texture of the mats. In olden times, it took several months or even a year for a woman to finish a mat, which has no use value but is used a gift that is exchanged in ceremonies. Although fine mats used to be prized treasures, modern mats, produced after WWII, have been coarse and of poor quality. The fine mats’ revival is a movement that was started in the 1990s by an NGO. Later, in the 2000s, the government took it over as part of their gender development policy. The revival aims to empower women by emphasizing their traditional role as women in society (the maximalization of gender difference) while promoting income generation for weavers (the minimalization of gender gaps). This paper describes this policy based on the author’s anthropological research, and analyzes it in the context of present Samoan society where a subsistence economy still prevails at the same time as a cash economy is increasingly intruding into people’s lives.